

『西表島の農耕文化——海上の道の発見』のできるまで

安溪 遊地

(国際文化学部)

1974年6月、私は始めて西表島を訪れた。大学院で先生に与えられたテーマは、廃村研究だった。今西錦司先生の弟子の一人、伊谷純一郎先生がおられた京都大学の自然人類学研究室では、本格的なフィールドワークとしてのアフリカ行きの前に、沖縄の島の一つで足慣らしの研究をするのがひとつの習慣になっていた。

私も、アフリカに行かせてもらいたい一心で大学院に入ったのだが、まさか西表島に30年以上も通って、論文集を出させてもらうほど深入りするとは思っていなかった。

この論文集の出版には山口県立大学の出版助成事業として100万円をいただいた。2007年3月に法政大学出版局から出版された表記の本ができるまでの経過と今後の研究の計画を簡単にまとめておきたい。

私の研究のテーマは、西表島の自然と文化の総合的な地域研究である。家族ぐるみでの滞在日数は、延べにして三年近くになっている。日本列島の南の端に位置する八重山の島々は、またたくさんの調査にさらされる地域でもあります。そこでは、宮本常一先生の造語である調査地被害つまり、「される側の迷惑」が、激しい憤りをもって語られる場面も多かった。単に被害を語るだけでなく、「人が救われるなら学問で救われる。滅びるならば学問で滅びる。だから正しい学問を子ども達にはさせなさい。」という、島のおばあちゃんの智恵の言葉もいただいた。

ではなにが「正しい学問」なのか、それを島の方々から問われつつ、自問しながらフィールドワーカーとしての道を歩んできた。アフリカの森の中や、フランスやスペインでも、そして最近では地元・山口でもフィールドワークを実践してきているが、常にこの問いかけを忘れたことはない。

調査の成果を地元に戻元しようとしてくれるのはいいが、分厚い報告書をもらっても、地元の人間には読む気力も湧いてこない、と言われたことがある。学問的な内容をわかりやすくかみ砕いて伝える努力をしてほしいというのだ。そこで、この本では冒頭に「西表島を愛するみなさま

へ」という、島の人たちや西表ファンの人たちへのメッセージを置いた。以下はその抜粋である。

序論には、この本を読むための入り口に当たることが書いてあります。ヤマネコだとか、自然保護だとかの面が強調される西表島ですが、そこには歴史も文化もあり、何よりも、島の方々がその自然をよく知って賢く利用してきたという面も大切ではないか、という見方を示したものです。この本の中での方言の書き方と、聞かせてくださったお話の内容を論文の中に使わせていただいた方々のお名前も、感謝の気持ちをこめて載せました。

「第I部 稲作の世界——人と自然と神々と」は、西表島西部を中心に、八重山全体の稲作が、在来稲の時代から今日までどのような特徴をもっている稲作なのか、そのことを知るための勉強（フィールドワーク）の成果です。名護の沖縄県農試に栽培されていた八重山在来稲をもらい受けて、島の高齢者のみなさんに見ていただき、それを手がかりに昔のイネの品種のこと、栽培の方法のこと、新しく蓬莱米が入ってきた時に起こった変化のことなどを調べました。その結果、八重山在来稲の中には、はるか南の島々から「海上の道」を通して渡ってきたものがあること、そして、その「海上の道」は、縄文時代にはすでに九州まで通じていたらしいことなどがしだいに判ってきたのです。さらに、実際に農作業のお手伝いをしながら、さまざまな祭りや儀式にも参加させていただく中で、島の方々の深い精神世界にも招き入れていただくことができました。そんな経験から与那国・西表に漂着した朝鮮・済州島民の漂流記を読み直してみたりすると、小さな笛で稲に宿る神をお起こしするといった習慣が、500年以上も続いてきたことに驚かされます。そして、豊作を祈願し、みのりに感謝するさまざまな祭りと、それに伴う古謡の数々の豊かさにも気づきました。ここでは、1971年に廃村となった網取村に残っていた伝承や古式

ゆかしい祭りと古謡を、山田武男さんや鹿川・崎山・網取出身者の「うるち会」のみなさんとの共同作業で記録したものから抜粋しておきました。1948年に廃村となった崎山村の暮らしの中の稲作とかかわる部分についても、川平永美さんをお願いして書いていただいた貴重な記事を載せました。

「第Ⅱ部 畑作——南からの道、北からの道」は、日本人が穀物を作り始める前は、サトイモやヤマイモの仲間を主食にしていた時期があるのではないか、さらに万葉集でサトイモを指す「ウモ（宇毛）」ということばは、共通語の「イモ」や沖縄の「ウム」のもとで、これは南島（オーストロネシア）語でヤマイモを指す「ウビ」ということばにつながるのではないかと、という有名な仮説への挑戦から始めました。その結果、サトイモ（タイモもこれに含みます）の仲間には南方系と北方系（というか中国大陸系）とがあって、西表島は南方系が多いということがわかりました。私の妻の安溪貴子が、その後トカラ列島や屋久島まで足を伸ばして調べたところ、この南方系のサトイモが優勢な地域は屋久島の南半分までは広がっていて、屋久島の北半分では北方系が優勢だということがわかったのです。そして、ヤマノイモ類については、八重山でよくつくられる二種類ともが熱帯系で、とくに西表島では焼畑に作って主食として食べることがあったこともわかりました。また、名前については網取のように古風をよく残していた村では、サトイモ類は《〜ムチ》とずいき主体の言い方が主で、ヤマノイモ類だけが《カツァンム》のように《〜ンム》系の名前をもつことがわかりました。これに基づいて八重山をはじめとする南琉球は、北琉球以北の島々とはことなり、ヤマノイモだけをンム／ウビとよぶ文化圏に属していた可能性を指摘しました。西表島の焼畑については、ひとつの試みとして島の方々の語りだけをまず収録して、ついで、その意味を分析するという二段構えの書き方をしています。その結果、西表では焼畑を作ったあと、10年以上休ませて森に返す《キャンバテ》が大切だったこと、その休閑の期間が長かったのは、イノシシを防ぐための垣根にする木が生えるまで待つことが必要だったためらしいことなどが判りました。18世紀の地方文書『慶来慶田城由来記』には、内離・外離の両島からイノシシを追い出したあと、粟が大豊作になったが、すぐに収量が下がってしまったということが書いてあります。西表の焼畑ではまさにイノシシが地力を守っていたとも言えるのです。そして、主な古文書に

でてくる栽培植物の名前を整理して、それがなんだったのかを推定して西表方言をつけるという報告でこの章をしめくくりました。

「第Ⅲ部 橋をかける——島々の交流をめぐって」では、ひとつの島から外に出て、島と島を結ぶという見方をした報告を集めてみました。短期間でしたが与那国島に通って、農民の暮らしのお話を聞きました。その中で西表島の網取村に長く暮らした経験がお客様の泊祖良さんのお話は貴重で、西表島と与那国の違いを印象的に描くことができました。与那国での「正しい盗み方と正しい盗まれ方」という記事を補足としてつけています。その次は、私たちがアフリカの森と大河の村々を訪ねて人と自然の関係や物々交換経済の研究をしたあと、初めて気づいたテーマの論文です。西表島西部の祖納・干立の人たちと、海路40キロをへだてた黒島の人たちが、稲束と灰の物々交換をしていた、という記録です。大正時代のことなので、黒島の灰が何の灰でいったい何に使ったのかも始めは判りませんでしたが、実際にその現場に立ち会った方々のお話によって、黒島のソテツの葉の灰を西表島の田の肥料としていたことがわかりました。そして、稲束が一種の貨幣になっていたことを、アフリカとの比較の上で論証します。そのあとの三つの短い報告は、堅い学問の話ではなくて、島の方々が無農薬米の産直を始めるお手伝いをするという「ヤマネコ印西表安心米」の動きの報告です。それまでにほとんど経験のない水田の農薬散布が西表島にとってどのような影響をもつかについての警告を、全国で読まれている雑誌で報告しました。続いては、一九八八年一月に石垣金星さんの「西表をほりおこす会」が主催したシンポジウムで、西表島の地元の方々二〇〇人にお集まりいただいてお話した「自然利用の歴史——西表をみなおすために」という講演の記録です。その呼びかけが実際に動きはじめて、沖縄だけでなく全国の消費者のみなさんにも「ヤマネコ印西表安心米」の産直の絆を広げるために手紙形式で書いたのが、最後の「西表島で無農薬米の産直が始まった」です。

あとがきである「地域が学校、地元が先生」では、西表の方々の、地域研究や調査はこんなふうにしてほしい、という厳しい指摘の声を、自戒の気持ちをこめて掲載させていただきました。そして、最後に、私に西表島での地域研究を勧めてくださった恩師・伊谷純一郎先生の教えと、それを出発点とする私たちの西表地域研究の歩みを簡単にまとめておきました。

最後にある引用文献は、この本を書くために引用した文献を著者の五〇音順に並べたもので、本文中では（伊谷 1960）などと簡単に記しているものです。索引は、事項・人名索引を準備しました。

みなさまに教えていただいたことから、こんなにいろいろな大切なことがわかってきたことを本当にありがたく思っています。《シカイトゥ ミーハイユー！》。

2007年9月、西表島を訪ねた。竹富町史編集のための西表部会の月例会があるので、誘われて参加してみた。島の方言集をまとめ上げた長老のMさんを筆頭に、30代から50代ぐらいの女性たちが中心の定例の勉強会だという。驚いたことに、そこで読まれていたテキストは、本論文集に収録した「西表島の焼畑」だった。朗読し、方言を確認し、自分たちの経験とてらしあわせて自由に語り合う。沖縄ではこうした語り合いをユンタクというのであるが、何十年か昔の島の女性たちの暮らしを知る資料として使っているという。去年は、男たちの暮らしが中心に語られている資料として「西表島の稲作」を読んだという。このユンタク会の仕掛け人である琉球大学教育学部の里井洋一先生は、こうした勉強を通して、自分たちの島の歴史を若い人自身が語れるようになる、そのことをめざしているのだとおっしゃった。その勉強会の教科書にしている本を書いた本人がその現場に現れるのは、これはおもしろいじゃないの？とおっしゃった。しかし、地域研究者がまとめたものが地域の文化の伝承の教科書になって本当によいのか、という問いかけ（安溪、2006）をも思い起こしつつ、地域に学ぶ者として、まことに身の引き締まる思いを新たにしたのであった。

西表島を中心とする私の南島地域研究は、現在も進行中である。当面は科学研究費補助金をいただいている、西表島の地名データベースの完成をめざしつつ、総合地球環境学研究所のプロジェクト員として、奄美・沖縄の人と自然の歴史を総合的に研究するというチームのお世話もしている。

こうした地域研究を続けてくるために、たくさんの方からのご支援をいただいている。本書に出版助成をみとめてくださった、山口県立大学の方にも改めてお礼申し上げたい。

引用文献

安溪遊地、「フィールドでの『濃い関わり』とその落とし穴——西表島での経験から」『文化人類学』79(4):

528-542

（宮本常一・安溪遊地，2008『フィールドワーク実践ハンドブッカー調査被害を考える』山口県立大学・現代GP・地域の活性化支援出版物にも収録）